せない著書である．

（山崎　敬）

スミレに魅せられた植物写真家が，いくつかの外来品を含む150種類をカラー写真でまとめたものである．花の正面と側面および中心部の拡大写真を主体に，葉や花の変異まで含めて記録している．ほとんどの種類についている超拡大によるめしべの上・側・下面の映像は，おし葉ではもちろん見えず，生品ではおしべに囲まれて見落としてしまう大事な特徴をよく見せてくれ，たいへん啓発される．私もパンジーを学生に観察させたとき，柱頭の断面を作ったら，中が空洞でそこが本当の柱頭であることを知って驚いたことがある．ところどころに観察記事，文学，紀行文などが挿入され，読物としても役立つよう配慮されている．

（金井弘夫）

□薄葉　重：**虫こぶ入門**　251 pp. 八坂書房．￥2,400.

採集していれば，虫こぶや菌こぶに出会うことは少なくない．ヌルデやイスノキのゴールは，むしろその種類の特徴としてとりあげられるが，標本を作るときには虫こぶのような余計なものがついていると敬遠し勝ちである．菌こぶは植物関係者の研究対象となるが，虫こぶの方は植物の人間からはどちらかというと疎遠である．ヌルデの虫こぶを作るアブラムシが，チョウチンゴケの仲間を中間宿主にしていることを，おぼろげに知っている程度である．しかし，生物界の現象がたくさんの種類の相互関係で成立していることを思えば，植物の研究だから植物だけ見ていればよいとは言っていられなくなってきた．花と花粉媒介生物との関係は，近来研究者が増加しており，共進化という単語もゆきわたってきた．虫こぶを作る動物はアブラムシ，タマバエ，タマバチ，キジラミなど，昆虫を主体に多様であり，その複雑な生活史や集団生活における社会構造などが鋭意研究されている．本書はまとめにくい「虫こぶ学」を通覧し，興味を起こさせようと書かれたもので，自然観察の予備知識として知っておいたら有用なことがらがたくさん含まれている．第一章は「虫こぶの文化誌」で，古来から知られた虫こぶに関するトピックや利用のはなしが紹介される．第二章は「虫こぶの生物学」で，こぶの形成の仕組み，それにかかわる生物などが紹介されている．第三章は「虫こぶ観察ノートから」の表題で，著者の数々の体験や観察が披露されており，この章が一番生き生きしている．最後に観察の手引きと，日本で普通にみられるゴールのリストがあり，45科98種類の植物があげられている．この数は寄主が研究されたものに限られているので，実際にはもっと多いだろう．本書の知識を身につけておけば，野外で「虫こぶだ…。」でおしまいにする前に，いくばくかの観察をつけ加えることができるので，自然に対する理解をより深めることができるだろう．野外でよく出会う食痕についても，こういう解説書がほしい．巻末に用語解説，参考文献，索引がついている．

（金井弘夫）

□西口親雄：**森のシナリオ，写真物語・森の生態系**　148 pp. 1996. 八坂書房．￥2,500.

森林動物を専攻した著者が，永年の演習林勤務の間にものした写真，スケッチ，観察記，エッセイである．図鑑や解説書ではなく，どの頁を開いてもよい．なにげなく目にする自然現象について，著者の蘊蓄を分けてもらえる．自然はそういう予備知識の有無で，たいそう違ったものに見えるものだ．書名よりずっとくだけた内容で，一般読者にも十分すすめられる本である．

（金井弘夫）

□岩槻邦男：**シダ植物の自然史**　259pp. 1996. 東京大学出版会．￥3,502.

定年をむかえた著者の研究回顧の書であるが，そこらの回顧録とはかなり様子がちがう．誰もが自分の足跡を肯定的に書くのは当然だが，そのときどきの自分や他人の業績が，ささいなことまで実に有機的に関連づけられ，強く言い切る口調で一貫しているので，まるでこれ以外にとる道は無かったと思わせるほどだ．著者がかかわったシダ植物について，フロラ，形態，生活史の研究からはじまって，最近の**DNA**による系統解析にいたるまで，世界の情勢も取り入れながら，「生きているとはどういうことか」（このことばは繰り返し登場する）を追求した過程がいきいきと描かれ